ていると思われる。

②望月はこの中部山岳地帯を横断する中山道の宿で，近世初頭中山道の開通に伴い新設された集落である。峠越を控えて栄えた東の碓水峠，西の和田峠麓の宿の中間に位置し，宿泊機能の低い仲継通過地的な宿で，人口，戸数も中山道で最も少ない部類に属した。

③望月は蓼科山北麓の鹿曲川河畔に，17世紀初頭に宿つくりが始められ，中頃には宿（本町）はその形態を整え，川向うに新町が形成されたと考えられる。ところが18世紀中頃洪水により新町は流亡し，本町続きに移された。しかし，この頃が宿としては最も繁栄した時期と考えられ，その後は衰退化の方向をたどり，飢饉や天災が拍車をかけ人口は減少し，宿は窮乏していった。

④明治に入り宿は廃され，望月宿はその機能を失うが，鉄道からはずれた同地域の交通の中心として発展する。特に蚕糸業の発達で周辺の蚕糸の集散地となり，それに伴い遊興的性格をもつ商業地として，大正から昭和の初期に繁栄をみる。しかし昭和恐慌以後蚕糸業は衰退し戦時体制に入ると町の繁栄も絶たれる。

⑤明治以降，町はまず旧宿を中心に発展していく。旧宿一帯はその形態を維持し長らく町の中心となっていたが，町の拡大に伴い次第に諸機能は新しい市街地に移り，相対的に旧宿の町における地位は低下していった。新道は旧宿を避けるように建設されていき，漸次旧宿が道路から取残される形になってきている。

⑥旧宿一帯の宅地割は宿時代と殆ど変わらず，沿道の家のつくり等にも往時の面影をたどることができる。しかし近年，町並は変貌の速度を早めている。現在の旧宿一帯は新旧家屋が混在し宅地外利用も見られ，又空地や空家も所々にあり，家屋が通りに沿って軒を連ねる宿場町の町並形態は崩れ始めている。道路との接触から生まれ，道路との関係によって維持されてきた旧宿一帯は，現在では道路との関係を絶たれ，その持続力を失いつつあるように思われる。

かかるように，旧中山道の宿望月はその発生から今日に至るまで道路交通と不可分な集落で，交通の変化に伴いその機能，形態を変化させてきたと言えよう。

立山山麓の宿坊村芦峅（くら）寺の集落機能変化

安　川　彩　子

「特殊な性格をもった集落が，その根本となす特殊性を失ったとき，その機能はどのように変化していくのか」というのが私の研究のテーマである。芦峅寺は，立山信仰登山の宿坊村として江戸時代に全盛期を迎えたが，明治維新の際の廃仏毀釈により，その根本を失うことになった。宿坊村という形が整っていた集落が，これを契機にどのように解体し，その集落機能はどのように変化していくか探ろうというものである。

第１章では，芦峅寺の成立の背景となった立山山岳地域の地形を概説し，第２章は立山信仰と芦峅寺の関連，第３章では明治以後の芦峅寺をとりまく社会環境の変化のうち，特に大きな影響を与えたと思われる①廃仏毀釈，②近代登山の勃興と登山ブーム，③交通条件の変化の３つのことについて述

べ，第４章では，全戸の明治以後の世帯主の職業の変遷を聴取により把握し，第３章の社会環境の変化によって集落機能はどのように変わっていったか，その実態を述べた。

芦峅寺は，標高約400m，常願川右岸の河岸段丘上にある現在162戸から成る集落である。この集落は奈良から平安にかけて修験者が住みついたのがその始まりだと言われ，立山信仰の発展とともに，江戸時代には宿坊村としてその全盛期を迎えた。江戸時代の芦峅寺は33坊５社人から成る一山組織（佐伯）と門前の佐伯，宗教的機能には全く参与しない先住民志鷹という２つの氏族，３つの階層で構成されていた。33坊の衆徒は夏は立山に籠り冬には各担当国に巡教（配札檀那廻り）に出かけた。立山へ信仰登山客を導くのは，登山ガイドと宗教的教化を兼ねる「中語」で，主として門前の佐伯がこれにあたった。参詣者は平年６～7,000人は下らず，芦峅寺は繁栄した。ところが，廃仏毀釈により神仏習合の立山信仰は，その根本を失うことになり，参詣者は激減した。宗教的機能の担い手であった一山組織の受けた衝撃は大きく，転職を余儀なくされる者が相次ぎ村外へ移住する者も多く，現在33坊のうち子孫が村内に残存しているのは17軒にすぎない。門前の佐伯や志鷹には一山ほどの動揺はみられず，中語の経験を生かして山岳ガイドとして生計をたてる者が多く，移住する者も一山組織ほど多くはなかった。

一方，明治以後，近代登山が勃興し，その後スポーツ登山の時代を経て，交通の発達と相俟って一般登山客も増加すると，芦峅寺は山岳ガイドと登山基地としての性格を強めた。しかし，登山基地として安定したのも束の間で，鉄道がさらに延長され芦峅寺住民が所有するなど，登山基地としての性格は失われ，また，登山技術の進歩，交通機関の発達，山小屋の整備により山が大衆のものとなるに及び，ガイドは不要になり芦峅寺はガイドの村としての機能も失った。

戦後，サラリーマン化が著しく進み，現在世帯主の83％がサラリーマンであるが，芦峅寺に特徴的なのは，立山山岳観光地区内の33の山小屋のうち18軒を芦峅寺に住民が所有するなど，依然として山に積極的に労働の場を見出だそうという点である。芦峅寺が登山ルートからも国内公園内からも離れてしまいながら，依然として昔からの山岳の中に山小屋経営を通じて強い勢力を持っていることは注目に値するであろう。1,000年以上も続いている立山との密接なつながり，立山とともにある村という誇りがその一因であるように思える。

ごみ処理施設の立地とごみ資源化に関する考察

渡　辺　公　江

ごみ処理施設は，「迷惑施設」といわれて住民からきらわれる。特殊建築物の一つである為，その立地は一般に地域住民から反対される傾向にあり，地元住民の「施設立地の賛同」は，ごみ処理施設の立地の場合，何よりも重要な要因である，「住民の賛同」を得られなければ，立地予定地がいかに，①環境アセスメントを行なって科学的に公害の蓋然性を検討し問題のない適地と思われても，②収集・輸送の効率がよく，その結果，清掃費用のうちの人件費が節減されるにしても，その場所の立地が実際に不可能なことは，数々の裁判例が示す通りである。この，「住民の賛同」を得る為に，たとえ